



Column 「心の復興」が 12 かなう支援を

～(特活)*JEN木山啓子理事・事務局長インタビュー～

国内外の紛争や災害の現場で活躍するNGOのJENの
木山啓子理事・事務局長にお話を伺いました。

**長年にわたり、紛争や災害に苦しんでいる人たちに
対する支援に携わってこられました。その取組の
中で、重視されてきたこと、最も力を注がれてきたこ
とは何ですか。**

紛争や災害で人々が失うのは、物質的なものだけでは
ありません。支援を続けるうちに、人が生きていく上での
目に見えないものの存在の大きさを強く意識するようにな
りました。それらは、愛情、絆、感謝、尊厳、自信、知識、哲
学など様々です。悲しみが深すぎてこれらを感じられず、
復興に向けて歩み始めることができなくなる人もいます。
怪我を癒し、食料を提供し、雨をしのげる場所を確保する
ことはもちろんですが、人間をトータルでとらえて、一人ひ
とりが尊厳を取り戻してゆくのを支えるという自立支援に
力を注いできたつもりです。具体的には、どんな支援にも
「心の復興」と「コミュニティ(地域社会)再生」の要素を
取り入れるように気をつけてきました。これは時間がかか
るように見えますが、尊厳を取り戻した人々が推進する復
興は、後戻りしないので、撤退した後も復興が続いてゆく
という重要なメリットがあります。

**これまで、JENの活動の成果を実感したのはどんなと
きでしたか。**

2000年頃に、(厳しい民族対立の紛争を経験した)旧
ユーゴスラビアで実施した『羊銀行』という事業がありま
す。これは、受精した羊を各家庭に6頭配布し、生まれた
子羊のうち3頭を別の被災者のために返済してもらおうとい
う事業でした。支援事業を終了して4年ほど経って、その
後の様子を見に訪問した際、羊が見事に増えていたのを見
て感動しました。各家庭に30頭くらいに増えていたのだ
です。増やし方も世話の仕方も学んでもらい、さらに自ら
の生計を立てるといふ事業の成果でしたが、他の被災者の
ために子羊を提供するという設定も功を奏したと思ってい
ます。挨拶もできないほど深い悲しみの中にあつた
方々が、立派に再生し、他の被災者を支えていました。

**新潟中越地震やこの度の東日本大震災に際しても、
率先して被災地に向かい、支援の手を差し伸べられて
いますが、JENならではの取組をお聞かせください。**

実は、海外での支援の経験が、日本でこれほど活かされ
るとは考えていませんでした。海外でも日本でも、土地の
文化や習わしを尊重しながら、現地の方々が中心になって
物事を進めることが大切です。人は、どれほどひどい状況
にあつても自立する力を持っていると信じています。その
力が発揮されるような工夫を凝らすのが、JENならではの
取組です。新潟では、小さな村にボランティアを送り続け
て、若者の移住を実現し、過疎化を阻止するお手伝いもし
ましたが、これも村人たちが自分から望んで実行するよう
なサポートができたからだと考えています。

**外務省が公表した「ODAのあり方に関する検討」にお
いても、日本のODAは、NGOとの一層の連携を強化す
ることが求められています。今後の開発協力にはどの
ようなことを期待されますか。**

良い連携とは、互いの力を活かし合うだけでなく、共に新
しい何かを生み出してゆける状態だと考えています。NGO
が要望を出し、外務省が資金を出す、というだけの関係で
は、より良い関係を発展させるのに時間がかかりすぎます。
密接に連絡を取り合い、互いの優位な特性を活かし合っ
て、本当に効果の上がる事業を生み出していくために、建
設的な批判をし合い、徹底的な議論と実践を繰り返せる成
熟した関係の構築が必要だと思います。様々な考え方を持
つ様々なステークホルダー(関係当事者)たちであっても、
貧困や紛争のない世界を共に目指すという共通の目的を
持った、真のパートナーでありたいと、心から願っています。



ハイチの孤児院を訪れる木山さん(写真提供: JEN)

*特活: 特定非営利活動法人(NPO法人)